

大学と企業の連携による新たな交流機会と場の創出

Business-university Collaboration in Search of a Place of Learning with Extended Social Interactions

長 尾 洋 子

Yoko Nagao

畑 中 朋 子

Tomoko Hatanaka

平 井 宏 典

Hironori Hirai

【Abstract】

Universities are expected to play a role in society as a cultural resource which offers new ideas and values created through intellectual activities. However, it is concerning that such expectations are not fully met because the learning environment of Japanese universities tends to be homogenous and uniform. This paper addresses such lack of diversity by examining an action research project aimed at creating a space for stimulating new ideas and values through the collaboration between Wako University and a local restaurant/café business in Machida City, a suburb of Tokyo. The project developed an original learning program modelled on informal conversations in a living room or café. It was designed for students and the public to meet people with different backgrounds, listen to each other and share ideas and values. The keys to making this work were changing the contexts of learning and facilitating multi-directional exchanges among participants.

【キーワード】

文化資源、産学連携、交流、カフェ、まちづくり、カルチャー・スポット

1. はじめに

1.1 本稿の目的

2018年度に和光大学、株式会社キープ・ウィルダイニング、西武信用金庫の三者は、産学連携プロジェクト「町にカルチャー・スポットをつくる——地域資源の活用から新たな空間創出にむけた実践的研究」を行った。このプロジェクトは地域の知の拠点および文化資源としてさまざまな可能性を秘める大学と、ローカルブランディングによるまちづくりを目指して飲食ビジネスを展開する企業との連携により、地域における文化資源の

新たな活用・創出の可能性を探ることを目的とするものであった。本稿はその活動および成果報告である。

1.2 プロジェクトの経緯、問題認識および目的

和光大学が立地する多摩地域南部の町田市は都心へのアクセスが良好であると同時に緑が多く、「住む町」としてのイメージが強い郊外都市である。大学や専門学校も多いが若者や現役世代の自宅外での文化的活動は都心に惹きつけられやすく、また地元での生涯教育への参加や文化的活動は専業主婦や高齢者に傾きがちといえる¹⁾。年齢層やライフステージなどによる社会生活の分離やその

固定化は社会生活そのもの、そして教育や文化芸術にとってけっして望ましいものではない。なぜなら社会・文化の多様な構成を見えにくくし、現在と未来の課題に応える柔軟性や創発力を削ぐおそれがあるからである。

大学が学生や市民に提供している教育プログラムもこうした偏りから逃れられない面があると考えられる。本プロジェクトはこのような地域と大学における教育プログラムに通底する問題認識の上に立ったものである。その上で、本プロジェクトは若い世代の感性を尊重し地域社会に貢献する事業者と大学の連携によって、文化芸術や社会生活と学びの場にまつわる新たな可能性を提示することを目的としている。プロジェクト構想の背景にはこうした地域についての認識と問題意識があった。

本プロジェクトに先立って、長尾と畑中は学生の視点で文化資源やその価値を見出し、地元住民やこの地域への訪問者、学生自身が創発力を高め、ともに文化を愉しみ培っていく活動を行うには何が必要かを探り始めていた²⁾。授業と関連づけて調査研究を推進する手法は、若者(学生)の創発力を向上させるうえで有効であったが、それを社会的な活動へと方向づけていくためには、すでに文化資源の発掘や創出を手がけている市民から直接学び、地域社会との関わりを深める試みを続けていくことが重要であることがわかった。

地域文化の活性化や市民参加型のまちづくりのワークショップについては、米国の環境デザイナーのハルプリンらによって早い時期からドキュメント化が試みられてきた(ハルプリン・バーンズ 1989)。都市設計出身のコミュニティデザイナーである山崎亮も日本の地方自治体における事例を通して、ハードよりも人々をつなぐソフト的な知見にもとづくコミュニティづくりの重要性を唱えている(山崎 2011)。

今回のプロジェクトで交流デザインを担当した畑中は、ワークショップデザイナー育成の第一人者である荻宿俊文のチームと共に香川県の地域文化施設の人材育成に取り組み、そのコミュニケーション分析モデルを描いている(畑中 2006)。さ

らに、イベントの進行役(詳細は後述)の平井は、神奈川県西部を中心に地域におけるまちづくりや文化芸術イベントの企画運営や組織・人材のマネジメントを行ってきた(平井 2008)。

おりしも「地域の商工会議所・商工会・中小企業と産学連携を行う大学等の学校法人を対象に、応援資金の贈呈や職員の参加協力を行い、地域産業の発展・活性化を支援」³⁾することを目的とした西武信用金庫の街づくり支援策「地域産業応援資金」(2018年)の存在を知り、産学連携によって地域社会との関わりを深める好機としかるから、本プロジェクト「町にカルチャー・スポットをつくる——地域資源の活用から新たな空間創出にむけた実践的研究」を計画した。

1.3 産学連携における本研究の位置づけ

産学連携は、主として研究機関である大学の高度で専門的な知的財産を有効活用するという点から、企業との共同研究などを通して技術移転・商品開発・新事業創出などを展開していくことを意味する。近年では、技術(テクノロジー)分野のみならず、人材育成や地域貢献、アクティブ・ラーニングまたはサービス・ラーニングと結びついた学習プログラムなどの分野でも注目されている。

文系の私立大学による産学連携は、理工系の分野で認識・蓄積されてきたような技術シーズを持っているわけではない(兼本 2015: 66)。また先行して行われた理工系と比べてそれほど進展しているとはいえず、調査例も多くはない(吉田 2014: iii, v, 兼本 2015: 71)⁴⁾。しかしながら、地域振興や人材育成の分野では期待されており、連携の成果が直接の連携機関を越えて波及するという意味で発展性が高いと見込まれている(兼本 2015: 72, 明治大学商学部 2011: 181-226, 浦野 2014)。

『大学と地域の連携に関する調査研究報告書』は、草津市と地域連携(産学連携を含む)を行ってきた立命館大学が今後の地域連携のキーワードとして「学び」「居場所」「生活」を挙げ、PBL(Project/Problem Based Learning)や多様な年

代、多様な価値観を持つ人との交流を通じた社会関係資本の充実、コミュニティの「場」が求められていると指摘する（草津市草津未来研究所 2015: 39-40）。また同報告書は草津市と複数の大学の連携状況の分析から、連携のしくみや手段の構築、連携機関間の課題の共有が有意義な連携を推進していくための鍵であることを明らかにした（45-46）。管見のかぎり、平田（2019）は西武信用金庫地域産業応援資金の助成によるプロジェクトについての唯一まとまった報告であり、構想から資金獲得、製品開発、商品化、販売・販促活動、評価といった一連のプロセスを開陳している。専門性や学生のアイデアといった大学ならではの強みを活かして一定の成果は挙げたものの、地元の新井山梅照院（新井薬師）ゆかりのご当地グルメとして開発された産学連携商品であることがほとんど認知されず、「ご当地グルメとしての地域活性化」には繋がらなかったとしている。その要因としては活性化が望まれた地区の住民組織や商店街、自治体との連携不足を挙げている。ここにも草津市草津未来研究所（2015）が指摘した「連携のしくみや手段の構築、連携機関間の課題の共有」といった課題が伏在しているといえる。

本研究はこうした私学の文系産学連携に位置づけられる。本プロジェクトは「連携のしくみや手段の構築」という課題に対しては実施体制やチーム・ビルディングの過程における工夫、「連携機関間の課題の共有」という課題に対しては主要コンセプトの共有・共用、コラボ・イベント企画の練り上げといった具体的方法を用いて取り組んだ。本稿は文系の産学連携の報告例を補うとともに、文系産学連携の強みとして指摘された発展性、今後よりいっそう重視すべき社会関係資本の充実、コミュニティの「場」、連携のしくみや手段の構築、連携機関間の課題の共有といった点について議論を深めていく素材を提供するものである。

1.4. 構成

本稿の構成は次のとおりである。次章でプロジェクトの主要コンセプトであるカルチャー・スポット、文化資源、カフェについて述べる。3章

ではプロジェクトの組織体制、事業内容を概略する。4章では企画の検討過程とチーム・ビルディングの過程、5章では連携機関がともに練り上げたイベント企画「夜カフェ×大学 まちまちトーク・クロッシング」の実施状況を報告する。6章ではイベント参加者を対象としたアンケートの分析を行う。結論として、本プロジェクトは①カフェ空間における共創的な交流と学びの実現、②「夜カフェ×大学」という交流型学習パッケージの提示、③交流ツールの開発、④カルチャー・スポット概念の深化といった成果が得られたものの、いくつかの課題が浮かび上がったことを述べる。

2. プロジェクトの主要コンセプトと方法

2.1. カルチャー・スポットと文化資源

「カルチャー・スポット」は、多種多様な「文化にふれる場所」「文化を生み出す場所」「余暇を楽しむ場所」をさし、人びとに刺戟（気づきや発見を含む）や憩いをもたらす場をあらわす概念である。地域の事業者や市民、学生（若者）にとって、なるべく分かりやすい言葉として前面に押し出しているが、その背景にあるのは文化資源の考え方である。

経済地理学者エリク・ジンマーマンによれば、資源とは環境（environment）の構成要素のうち、人間に利用されるものをさす。しかし、それは「ただ在る」のではなく、人間の欲求や利用能力との関連において用途や価値が見出され、利用可能な状態へと方向づける働きかけを必要とする。その意味で人間は環境の一部を資源「にする」のであり、言い換えれば、環境の一部は働きかけに応じて資源「になる」のである（ジンマーマン 1954: 45, 51, 内堀 2007: 19-21）。

文化資源とはそうした資源の文化的領域をさす概念であり、また言語、画像、文字、建築物、景観、祭礼、芸能、慣習などの有形・無形の文化的所産がどのように形成され、蓄積、継承、あるいは忘却される（されてきた）のかを考え、実践に結び付けていく視点でもある（内堀 2007, 山下 2007, 佐藤 2007）。文化資源は歴史、地域性、文

化財などとしてすでに蓄積され、認知された有形無形の文化的所産は集合的記憶や帰属意識、制度と結びついて環境を形成しており、意味づけ方・働きかけ方しだいで新たな展開を生じる可能性をもつ。たとえば2020年東京オリンピック・パラリンピックを見据えて始動した「東京文化資源会議」は、神保町には出版文化資源、秋葉原にはポップカルチャー資源、上野に芸術文化資源が蓄積されているとして、都心北部の文化資源集中区域を「東京文化資源区」と名付け、都市の新たなポテンシャルを引き出そうとしてきた（東京文化資源会議 2016a, 2016b）。文化資源の概念は環境のどの部分に、どのような意味や価値を付与するのか、どのような目的や活動に用いるのかといった問題を焦点化し、新たな文化形成を活発化する端緒となりえる。それは環境へと還流し、潜在的な資源となって人間の働きかけを待つこととなる。

このように、文化資源は所与のものとして「ある」のではなく、利用可能なもの「になる」転換可能性を捉えた概念であり（内堀 2007: 21）、「人間の欲求と利用能力の関係においてはじめて生成する」（内堀 2007: 20）。それは資源化が起る際の具体的な行為や場を捉えることのできる「行為志向的」（森山 2007: 65）な特性をもち、資源に着目した研究は「人びとが身の回りの世界の事物をいかに分かち合い、利用しているか、またそれをとおして、人と人との関係をいかに調節しているかを探る」（内堀 2007: 41）のに有効とされる。

長尾は文化地理学の見地から、空間や場所にかかわる文化資源に関心を寄せてきた。たとえば、長尾（2009）では地域芸能が演じられることによって、日常や労働を支配するリズムが崩され、管理や抑圧に抗する空間が生じる機制について論じた。地域芸能は先人によって受け継がれてきた文化的土壌の一部をなすという意味で環境を構成する。その祝祭性によって、末端の工場労働者に利する解放や抵抗の回路を開く文化資源ともなりうるのである。また、Nagao（2006）は近世の在郷町の面影を強くとどめる富山県八尾町において、町並、町屋、橋、石垣など町の環境をアート作品制作や展示に存分に活用して展開される芸術祭

「坂の町アート」の開催によって、町民の日常生活やふだん意識されない家々の隙間までもが資源化され、町の隠れた魅力が顕在化し、町内外のコミュニケーションが活発化した事例を扱った⁵⁾。

「カルチャー・スポット」は、このような研究をふまえて導きだされた文化資源と空間・場所との密接なかかわりを表す概念であり、教育の場や地域での社会生活で市民や学生（若者）にとって親しみやすい活動へと展開するための用語として編み出された⁶⁾。ここでいう親しみやすさとは、抽象的で堅苦しく聞こえかねない四字熟語「文化資源」に対して、「カルチャーセンター（スクール）」や「ポップカルチャー」といった用例を通じてより敷居が低い印象を与え（カルチャー）、「注目すべき場所」として具体的に思い浮かべやすい（スポット）⁷⁾ という意味である。つまり、企業、市民、学生にも受け入れられやすく、主体的にかかわりやすい活動＝プロジェクトを実施する方法として、カルチャー・スポットの語を用いるということである。

2.2. カフェ

本プロジェクトは「新たな空間創出」をめざして地域の文化資源に注目し、それを特定し活用する枠組みとして産学連携を捉え、参画者の主体性を引き出す方法としてカルチャー・スポットを提起した。「新たな空間創出」を実現するための方法としてもう一つ重視したのが「カフェ」である。

カフェは洋の東西を問わず、都市における社会生活にさまざまな活力をもたらした歴史をもつ（Ariès 1977, オルデンバーグ 2013, 小林 2000, ユンガー 1991, 増田 2008, ティーレ＝ドールマン 2000）。Razran（1940）の理論やアメリカの心理学者 Janis, Kaye, and Kirschner（1965）が行ったフィーリング・グッド実験に代表されるように、ものを食べながら快適な環境にいると人は肯定的な態度になり、リラックスした状態で交流を深められる傾向があることから、「ランチョンテクニック」としてビジネスランチや接待といった場面でカフェをはじめとする飲食店が活用されてきた（三浦・中村 2017）。また近年では、地縁

の希薄化や格差の拡大にともなう問題に対して新たな「たまり場」「居場所」として登場したコミュニティ・カフェ、科学と社会をつなぐサイエンス・カフェ、認知症の人とその家族、地域住民が交流し支え合う拠点としての認知症カフェなど、今日的課題に応えるコミュニケーションの場所として設けられるようになった（山納 2016, 朝日新聞社 CSR 推進部 2015）。さらに、人びとの主体性と創造性を効果的に引き出し、会議室のような機能空間では生み出されない集合知の構築が可能になる環境を「カフェ」になぞらえたコミュニケーション法「ワールド・カフェ」なども導入が進んでいる（ブラウン&アイザックス 2007, 鈴木・前田・松尾・磯部・山本 2018）。

本プロジェクトではカフェをカルチャー・スポットと捉え、大手チェーンや個人店とは異なるアプローチで多彩なカフェを相模原・町田地域に出店している事業者と連携を図ることによって、人びとが行き交うカフェの潜在的特性をいかに引き出し、身近なカルチャー・スポットとして意義ある空間にできるかに挑戦することとなった。

3. プロジェクトの概要

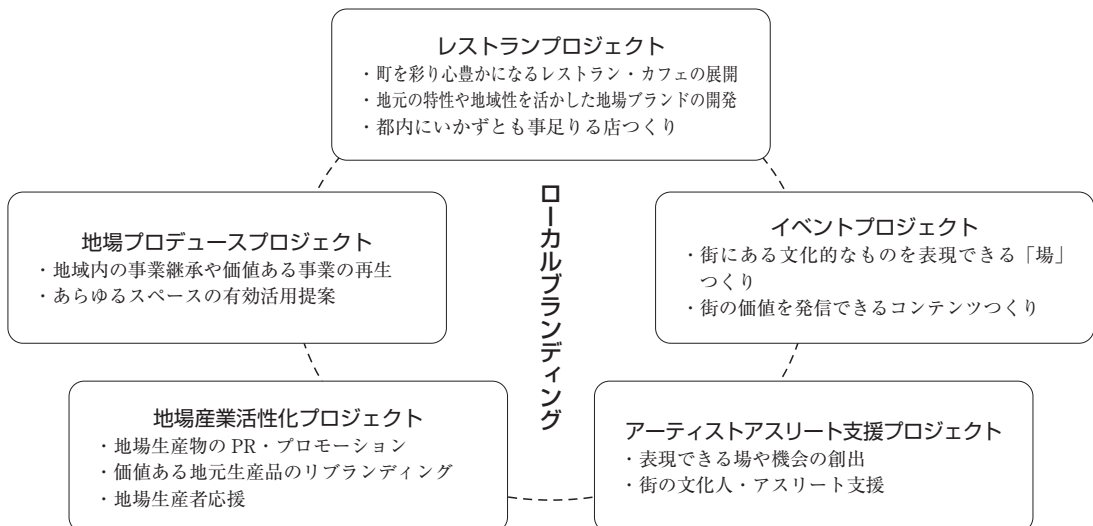
3.1. 連携機関

組織体制は表 1 に示したとおりである。町田市に本社を構える株式会社キープ・ウィルダイニングと長尾研究室とを連携機関とし、西武信用金庫

表 1 組織体制

連携機関	
和光大学 長尾研究室 株式会社 キープ・ウィルダイニング	
実行機関	
カルチャー・スポット実行員会 ※当初は「ミュージアム・シティ実行員会」であったが、企画会議を経て名称変更	
実行委員会メンバーと役割分担	
長尾洋子（表現学部総合文化学科） 株式会社キープ・ウィルダイニング社員（2名） 畑中朋子（表現学部芸術学科） 平井宏典（経済経営学部経営学科） 西武信用金庫職員	実行委員長、統括 企画、会場提供 広報、交流デザイン（ワークショップ、会場装飾など） マネジメント、会場進行 運営サポート

図 1 5つのプロジェクト（キープ・ウィルダイニング（n.d.）にもとづき筆者作成）



を交えた実行委員会体制を組んだ。

キープ・ウィルダイニングは2004年創業、本プロジェクト申請時において町田・相模原地域を中心に30店舗以上の個性的な飲食店（レストラン、居酒屋、カフェなど）を出店してきた企業である。外食クオリティサービス大賞を受賞（2009年、2010年）、2011年に町田市に本社を移転して以降、町田駅をはじめとした小田急線沿線の駅周辺に次々とカフェを出店して女性や若者の支持を得てきた。2017年には「おもてなし認証」の紺認証⁸⁾を取得している⁹⁾。「地域産業応援資金」申請準備の時点では、自社を育んだ町田・相模原地域〈マチサガ〉を「もっと豊かにする」「自分たちの手で活気に満ちた街創りに貢献する」という意図を込めて「ローカルブランディング」を旗印とし、図1に示した5つのプロジェクトを行ってきた。

本プロジェクトの連携先を選定するにあたっては和光大学地域連携研究センターを通じてマッチングを行う選択肢もあった。だが、2016年度に和光大学学生を対象に実施した「大学生のカルチャー・スポット利用についてのアンケート」において、キープ・ウィルダイニングが運営するカフェが回答に含まれていたことをきっかけに、保志真人代表取締役による講義を通じて長尾研究室とつながりができていた。プロジェクトの目的に適合し、すでにつながりのあったキープ・ウィルダイニングを連携先の第一候補として打診したところ承諾を得ることができたため、連携が実現することとなった。

3.2. 学内連携

実行委員会の大学側メンバーは「文化」「芸術」「まち」をキーワードに、文化地理学（長尾）、情報メディア・デザイン（畑中）、博物館経営論・産学連携実践論（平井）の分野で研究・教育にたずさわリ、芸術祭プロデュース、学術文化融合イベントでのカフェ企画、芸術祭プロデュース、民間・公共事業におけるコンテンツ提供など幅広く活動してきた。本プロジェクトにおいては、各メンバーの専門と経験を活かして表1のような役割

分担を行った。

また、大学の有する資源として学生の視点が有効であり、教育上も貴重な体験学習の機会になり得ることから、長尾ゼミ、畑中ゼミの学生が運営に参加した。学生の主な役割は会場係、交流ファシリテーター、会場装飾である。

予算管理には和光大学総務企画部企画室企画係（地域連携研究センター担当）があたった。これは地域産業応援資金が大学予算に組み込まれることから、大学の予算執行ルールに基づいて処理されるためである。また、地域連携研究センターが広報ルートをすでに構築していることから、広報の面でも協力を得ることになった。

3.3. 事業内容

事業内容としては、キープ・ウィルダイニングが運営する町田中心市街地のカフェで連続イベントを開催し、大学とまちなかのカフェのコラボレーションによる文化資源活用の新趣向を市民や若者に体験してもらう企画を立てた。

キープ・ウィルダイニング側からは会場として「44 APARTMENT（ダブルフォー・アパートメント）」が提案された。これはニューヨークのソーシャル・アパートメント（多様な人びとが交流する空間やアイテムを備えた居住空間）をイメージして設計されたカフェ店舗である。「44」は原町田4-4という立地に由来する。ニューヨークと町田という2つの街をオーバーラップさせ、当初のイベント・コンセプトに含まれる「世界の街とカルチャー・スポット」にふさわしいロケーションと判断された。

以上の企画は2018年1月末から2月下旬にかけて主に大学側メンバーが主導して検討・策定された。4月に西武信用金庫地域産業応援資金の採択が決定し、実行委員会が開催された。採択決定後に連携機関間で協議した結果、「夜カフェ×大学 まちまちトーク・クロッシング」を全体テーマとする連続2回のイベントを10月と12月を行うことに決定した。

表2 進行過程

	全体	交流ワークショップ
2018 年		
4 月 17 日	西武信用金庫地域産業応援資金贈呈式	
4 月 18 日	連携機関会議	
5 月 16 日	第 1 回実行委員会	
6 月 15 日	第 2 回実行委員会（実行委員会名称変更）	
6 月 20 日	大学メンバー会議	
6 月 26 日		学生スタッフに対するプロジェクト説明
7 月 17 日	プレイベント（関係者顔合わせ、リハーサル形式のイベント研修）	
7 月 26 日	大学メンバー会議	
8 月 2 日	企画会議	
8 月 18 日	広報、交流ワークショップ会議	
8 月下旬	プレスリリース開始	
8 月 28 日		
9 月 5 日		
9 月 7 日	第 2 回イベント語り手との打合せ	
9 月 19 日	大学ウェブサイト、ちらしによる広報開始	
9 月 26 日	大学メンバー打合せ	
9 月 26 日	第 3 回実行委員会	
10 月 16 日		
10 月 20 日	第 1 回イベント開催	
10 月 31 日	第 4 回実行委員会	
11 月 27 日	大学メンバー会議	
12 月 1 日	第 2 回イベント開催	
2019 年		
1 月 22 日	第 5 回実行委員会	

表3 企画概要

全体テーマ	夜カフェ×大学 まちまちトーク・クロッシング	
各回テーマ	第 1 回 ワシントン DC—首都を彩るフェスティバル	第 2 回 メキシコシティ—我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか
語り手	長尾洋子（和光大学准教授）	落合一泰（明星大学副学長、一橋大学名誉教授）
開催日時	2018 年 10 月 20 日（土）18:00 ～ 20:00	2018 年 12 月 1 日（土）18:00 ～ 20:00
参加費	500 円	500 円
募集人数	40 名	40 名
交流ワーク ショップ	まちまちシートの質問 ・行ってよかった町はどこですか？ ・なぜですか？（そこに何があったから？） ↓ 席の近い参加者とシェア ↓ 学生スタッフによる回収 ↓ まちまちパネルへの掲示と参加者の発言による 会場全体でのシェア	まちまちシートの質問 ・地元はどちらですか？ ・地元のお気に入りの場所、モノ、雰囲気などを一言 でいうと？ ↓ 席の近い参加者とシェア ↓ 学生スタッフによる回収 ↓ まちまちパネルへの掲示と参加者の発言による 会場全体でのシェア
食事の 主な内容	ブリッツ、ディーブフライドチキン、フレンチフライ、秦野産有機野菜のサラダ、各種ドリンク	
	海老名卵を使ったイタリアンオムレツ トマトパスタ	有機野菜のサラダ・ピザ メキシカン風トマトペンネ

4. 企画検討とチーム・ビルディング

4.1. 実行委員会を中心とした企画の練り上げ

進行過程は表2、企画概要は表3にまとめたとおりである。「協働事業成功の鍵は連携の強さである」という平井の知見にもとづき、4月から7月（おおむね学年暦の前期にあたる）はチーム・ビルディングに重点を置くこととし、並行してイベント企画を練り上げていった。

事業内容のメインとなる連続イベントは、申請時には「ミュージアム・シティ——世界の街とカルチャー・スポット」を全体テーマとしていたが、集客を考慮して再検討した。

検討の過程では、一般的にやや堅苦しく敷居の高いイメージを持たれているかもしれないという理由から「ミュージアム」の語は外すことにした。代わって本プロジェクトの根底にある関心、すなわち人びとの活動地域（生活環境や行動範囲）において何に価値観や魅力を見出しているかというカルチャー・スポットの発見や創出にかかわるテーマを中心に据えることにした。そこで新たに

「町田から世界の街へ——まちまちトークセッション」や「ダウタウン・トーク・トリップ」といった案が出されたが、2ヶ月半にわたる検討の結果、8月初旬に「夜カフェ×大学 まちまちトーク・クロッシング」に落ち着いた。

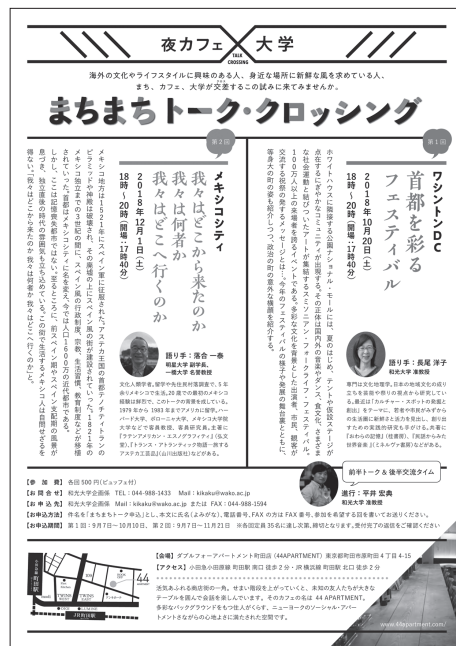
「夜カフェ」には大人の時間と空間、くつろぎ、好奇心をくすぐる感じ、親密さといった語感があり、住人が自由に会話を交わす「町のリビング」としてのソーシャル・アパートメントという会場のコンセプトがそのまま当てはまる。また「夜カフェ×大学」とすることで、大学の起源のひとつであるボローニャ大学を想起させると同時に、グローバル化や学際的な研究教育活動が進む現代の大学にとって新たなコミュニケーションの場やモードを探究する有効な切り口を提示できるとも考えた。さらに「コミュ力」「居場所」が問題とされる現代の日本社会に対しても、遊び心のある場づくりのアイデアとなりえるのでは、という期待も生まれた。

「まちまち」は「世界のさまざまな街」をさすばかりでなく、「区々（まちまち）＝多様性」を表す言葉でもある。文化芸術はいつも街角で、一

図2 ちらしデザイン



表



裏

様でない人と人との交流から生まれてきた。飲み物を片手に気楽に語らい、それがいつしか新たな文化として形作られていく。「夜カフェ×大学 まちまちトーク・クロッシング」というイベント名には、そのような場（カルチャー・スポット）を産学協働で創出するという意図を込めた。交流については「クロッシング（交差点）」の語で表現した。

検討過程のなかで、来場者の知的好奇心に応えるためには交流を銘打つだけでは不十分で、知識を得、視野の拡大を促す講演の要素が欲しいという意見がキープ・ウィルダイニング側から出された。そこで、前半は大学人の人脈を活かした専門家によるトークとすることとした。プログラムの後半は「まちまちトーク・クロッシング」（街についてのさまざまな語りを交差させる）という状態を会場内に創り出し、会場をカルチャー・スポットとして活性化させる企画を試みた。こうしたコンセプトを視覚化したのがちらしのデザインである（図2）。

飲食店の経営・プロデュースを主たる事業内容とする企業との連携であることから「食」もプロジェクトの重要な要素となりえたが、地場食率を高めるなど独自の工夫をしていることなどから、食材やメニューの面で新規性を盛り込むことは難しかった。そこで、すでに試みられているローカルブランディングの実践を本プロジェクトにおけるイベントにふさわしい形で見せる方針をとることで合意した。表3中、秦野産有機野菜のサラダ、第1回の海老名産の卵を使用したオムレット¹⁰⁾、第2回のメキシカン風トマトペンネはそうした方針の表れである。この点については映像上映、連携機関紹介、配布資料といった形で参加者に伝わるよう工夫した。

4.2. イベント・プログラムの設計と空間演出

今回は、カフェという空間を活かした学びと交流のイベントとして、双方向型の企画を交えることが期待されていた。そこで、全2時間の枠を2部構成とし、前半のトークでは海外のカルチャー・スポットに精通した語り手が「まち」に

図3 まちまちシート（第1回）

まちまちシートと記入例・カラー展開
平成丸ゴシック/A6サイズ(105, 148mm)

関しての事例を提供し、後半ではその内容を受けて、身近な地域の魅力発見やまちづくりにつながる知識とヒントを交換しあうことで、より自由な会話・交流への橋渡しをすることを目的に設計した（ワークショップを導入した「交流タイム」）。また、広報物やフライヤーの中でも講師を「語り手」、司会を「進行役」と言い換えることにより、できる限り、大学の講義ではなく、まちなかのカフェにふさわしい用語を用いることとした。

ワークショップへ導入する道具立て＝交流ツールとしては、参加者各々がQ&A形式でまちについての思いを書く「まちまちシート」（A6の用紙・図3）、それらを集積してマッピングするためのプラットフォームとして「まちまちパネル」を用意した（図5）。

この後半の交流タイムの間、参加者は店内を歩き回って立食形式で食事をとったり、パネルを見に行ったりすることができる。シートと一緒に配布された回答例には、一般の方々が答えそうなものから取って外した事例を入れることによって、より振幅のある多様性のある回答が得られることを図った。また、交流タイムの最後に一部の回答者を指名して発言して頂くことを想定していた

が、プライバシーに配慮しつつ、カジュアルな雰囲気を醸し出すため、参加者にはニックネームを使用して頂くことにした。

また、会場の雰囲気を演出するディスプレイとして、「まちまち×トーク」のロゴを入れたオリジナルフラッグを考案し、学生たちが制作・設置を行った。これは前半トークのテーマとも関連するパベル・ピカド（メキシコで祭りの際に飾られる切り絵の旗を繋げたもの）を模したもので、色とりどりの紙が参加者の視界に飛び込むことによる高揚感といった効果も意図している。

5. 「夜カフェ×大学 まちまちトーク・クロッシング」——イベント実施

イベントは2018年10月20日および12月1日の2回、いずれも土曜日の18:00～20:00というカフェ利用の多い時間帯に会場を貸し切って行われた。参加者数は第1回は41名、第2回は30名であった（図4）¹¹⁾。

「カルチャー・スポットの新たな活用・創出の可能性」の模索というプロジェクトの目的を意識して、イベント冒頭にはキープ・ウィルダイニングの社会事業的側面がうかがえる紹介映像を流した。これによって、会場のカフェがたんなる商業空間ではなく「飲食ノウハウ最大の価値は…アナログでリアルな人が集まるHUB（ハブ）を創れるという事」（キープ・ウィルダイニング n.d.）という信条をもつ地元企業が今回の企画に携わり、大学との協働を通じて価値創造に参画していることを伝えようとした。

図4 会場の様子



受付では各回のプログラムなどを掲載したリーフレット、「まちまちシート」、『カルスポ探検へようこそ』、アンケートを配付した。参加者に早い段階から交流（カルチャー・スポットとしての「場の創出」の要）のモードに誘導する意図から、リーフレットには「まちまちシート」の使用法と交流タイムで発言を求める場合がある旨をあらかじめ案内しておいた。また受付終了直後から会場に馴染み会話が促されるよう、ピュッフェ形式でドリンクや料理が提供された。

第1回は「ワシントン DC—首都を彩るフェスティバル」と題して、政治の町として知られるワシントンが文化の面から紹介された。国内外から毎年異なる国、地域、エスニック・グループなどを招いて開催されるスミソニアン・フォークライフ・フェスティバルの取材報告を中心に、文化都市としてのワシントンの魅力、その象徴的な場所と開放性について話題を提供した（語り手：長尾）。資料としてスミソニアン・フォークライフ・フェスティバルの会場およびその周辺に集積するカルチャー・スポットの紹介マップを作成し、カルチャー・スポットについて理解する手がかりを示した。

トークを受けて、来場者は「まちまちシート」に「行ってよかった町」とその理由（「そこに何があったから」）を記入し、それをもとにテーブルの同席者など周辺の参加者と共有した。歓談がある程度行われた段階で複数の学生が会場内を回って「まちまちシート」を回収し、交流デザイン担当者（畑中）の指示のもとに「まちまちパネル」上に分類、掲示を行った（図5、表4）。

パネルでは近隣地域～遠隔地といった大体の距離感を把握し、町のどのような面が魅力と捉えられ心に残っているかについての傾向を把握しやすくするため分類を行った。分類項目は伝統文化、文化施設、商業施設、自然、食文化、人々、街の雰囲気全体（町並など）の7つである。来場者間の共有・理解を助けるとともに、進行役のファシリテーション（実質的には来場者との会話）の円滑化に役立てた（図6）。

図5 まちまちパネル

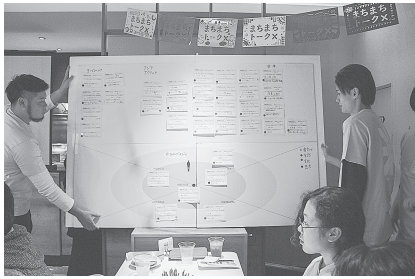


図6 進行役



表4 まちまちパネル記録

第1回 行ってよかった町はどこですか？ なぜ（そこに何があったから）？

分類：伝統文化、文化施設、商業施設、自然、食文化、人々、街の雰囲気全体～街並み（表中では各項目の頭文字を記載した）

東京近郊

行ってよかった町	なぜ（そこに何があったから？）	分類
神奈川県江ノ島	美味しいごはん、海	食
神奈川県鎌倉市	かんざしなど和物・日本文化・街並み	伝街
東京都八丈島	青い海・船	自
東京都八王子市	何もないようで色々あるから	街
東京・渋谷	多様性があり常に進化し続ける面白さがある	街
東京・秋葉原	電気街カオス	街

国内

行ってよかった町	なぜ（そこに何があったから？）	分類
北海道小樽市	ブランド化できている石造りの街並みが魅力的、ガラスやオルゴールなど上品さが町のイメージに直結	街伝
北海道天売島	360度の海・海鳥の聖地	自
北海道阿寒湖	素晴らしい景色と人の優しさにふれあえる町	自人
岩手県盛岡市	町の中の自然・おいしい蕎麦	自
福島県会津若松市	お城がキレイで歴史を感じさせる	伝
新潟県村山市	美味しいサケなどの食物と文化	食
山形県山形市と 広島県広島市	映画祭	文
栃木県日光鬼怒川	大きな橋の下から見た鬼怒川の景色（勢いがすごい）	自
山梨県道志村	とやの沢オートキャンプ場	自
富山県利賀村	演劇フェスティバル	文
滋賀県近江八幡	安土城	伝
京都府貴船	神社があるから	伝
大分県別府市	扇状地に広がる豊富な種類の温泉	自
鹿児島県鹿児島市	桜島の景色が雄大・お店の人もフレンドリー	自
沖縄県石垣島	満点の星空（夜に小さな帆船で楽しむことができる）	自
沖縄県由布島	のんびりしたところ、自然がリッチ	自
沖縄県宮古島	美しい海。美味しいマンゴー	自食

海外

行ってよかった町	なぜ（そこに何があったから？）	分類
ロンドン（イギリス）	多様性	街
マーストリヒト（オランダ）	中世の古い街並みがあったから（オランダで最も古い街といわれる）	伝
ベルリン（ドイツ）	オーガニックスーパーと美術館	食文
ケルン（ドイツ）	大聖堂が中央駅前にあるから	伝
パリ（フランス）	ご飯が美味しい、美術館	食文
リスボン（ポルトガル）	美味しいものと町の人たちの雰囲気	街人
メルボルン（オーストラリア）	「朝の文化」が素晴らしく感じたから	食
フィリピン諸島（フィリピン）	食・自然・人	食自人
瀋陽（中国）	1999年に住んでいた時に毎朝食べたワンタンと餃子	食
インド	貧困について深く考えさせられた（何度も現地に行くことが大事）	人街
インド	日本にはないエネルギーがあったから	人街

第2回 地元はどちらですか？ お気に入りの場所・モノ・雰囲気などを一言でいうと？

分類：伝統文化、文化施設、商業施設、自然、食文化、人々、街の雰囲気全体～街並み（表中では各項目の頭文字を記載した）

神奈川県

地元はどちら	お気に入りの場所・モノ・雰囲気など	分類
神奈川県真鶴町	真鶴港・草柳商店という酒屋（のんびり・にぎやか・自由）	商
神奈川県真鶴町	静か・おだやか・野良ネコ	街
神奈川県藤沢市	プラネタリウム	文
神奈川県藤沢市	海	自
神奈川県藤沢市	実家から見える江ノ島の花火・海・パラダイス	自伝
神奈川県厚木市	七沢温泉、自然が多い	自
神奈川県海老名市	メロンパンがおいしい	食
神奈川県綾瀬市	圏内で唯一駅のない市、郊外型店舗が充実していて食料品が良い	食商
神奈川県相模原市	伊勢丹、相模原公園、“何もないから面白い”	自商
神奈川県相模原市	家の近くから山が見える（大山～富士山）電車ですぐ大都会へ行ける！！	自
神奈川県相模原市	自然（星空・畑）と適度な田舎感	自街
神奈川県藤が丘	喫茶店	食
新百合ヶ丘	アルテリオ（劇場）	商
神奈川県川崎市	自宅の下公園	自
東神奈川	海に近い	自
神奈川県横浜市	港町公園	自
神奈川県横浜市	野毛の洋食屋さん「センターグリル」	食
神奈川県横須賀市	衣笠山	自
神奈川県横須賀市	猿島	自伝

東京都

地元はどちら	お気に入りの場所・モノ・雰囲気など	分類
東京都町田市	ごちゃごちゃして、色々な人がいてにぎやか	人
東京都町田市	ケツァール・コーヒー	食
東京都八王子南大沢	学生、アウトレット、遊歩道	自商人
東京都三軒茶屋	路地が楽しい	街
東京都中目黒	故郷が観光地になってしまった	街
東京都目黒	碑文谷公園	自
東京都新宿	新宿御苑・POP & VIOLENCE!	自街

全国・その他

地元はどちら	お気に入りの場所・モノ・雰囲気など	分類
埼玉県入間市内	入間市内の茶畑の風景・緑豊かな西武ライオンズ球場周辺	自
長野県御代田町	図書館	文
新潟県長岡市	長岡花火	自
大阪府豊中市	大阪ビジネス拠点へのベッドタウン	商人
愛知県名古屋市中区	味噌煮こみうどん、てんむす、味噌カツ、ひつまぶし、スガキヤラーメン、コメダ珈琲店、パチンコ	食商
メキシコシティ（メキシコ）	いくつもの文化が同居しているところ	人

前方中央のパネルを会場全体で見ながら、進行役（平井）が「まちまちシート」記入内容をピックアップし、「行ってよかった町」について質問したり、より詳しく紹介してもらったりした。たとえば「メルボルン」と記入した参加者は、オーストラリアに滞在した際に独特のコーヒー文化で活気つくメルボルンの朝の風景について語ってくれた。「大分県別府市」を挙げた大分出身の参加者は全国に数ある温泉のなかでも、別府は泉質も趣も異なる8つの湯が他の追随をゆるさないと力説した。演劇活動が深く根を下ろし、演劇人の存在がコミュニティになくてはならないほどにまでなった富山県南砺市の利賀村の例を紹介した参加者もいた。

第2回は「メキシコシティー我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」と題して町田ゆかりの文化人類学者・落合一泰氏を語り手とするトークが行われた。メキシコ地方にヨーロッパ人が足を踏み入れてから約500年にわたる複雑な歴史とアイデンティティについてのプレゼンテーションの後、落合氏のアクティブ・ラーニングの経験にもとづいた来場者とのやりとりがあった。

交流タイムは基本的に第1回と同様であるが、

「まちまちシート」には「地元」（生まれ育った、または住んでいる、活動している市町村名・駅名、通称などで回答可）とその地元の「お気に入りの場所・モノ・雰囲気など」を記入するよう促した。そのため前回とは変わって国内の回答が中心となり、「まちまちパネル」においては町田を中心にした同心円状に、神奈川県、東京都、全国・その他といった区分で配置した。分類項目は前回と同様である（表4）。これと関連して、リーフレットには長尾ゼミの学生が取材した和光大学周辺のカルチャー・スポットの紹介マップを掲載した。

進行役のファシリテーションによっていくつかの「地元」について発言を求めたところ、生活者の目に映った町の姿が交換されることとなった。たとえば、かつては軽工業地帯であった「東京都中目黒」（目黒区、東急線中目黒駅）は最近すっかり観光地に変貌し、工場の油が浮いていた目黒川はおしゃれな店が軒を連ねる桜の名所として知られるようになった。「神奈川県真鶴町」は石材と漁業の街で過疎地域に指定されたが実は移住者が増えている。とりたてて何もないのがかえってよく、年齢や立場を気にせず話し合える雰囲気があり心の温かさが感じられる。その他、入り組んだ路地が魅力の「東京都三軒茶屋」（世田谷区）、

都心から電車で1時間以内なのに星空が美しい「神奈川県相模原市」の相原、江ノ島の花火が庭から見える「神奈川県藤沢市」といった、来場者にとって通勤・通学圏内、生活圏内にあたる地域の知られざる姿や魅力が語られた。

6. アンケート回答の分析

各回のイベントの最後には、参加者を対象として選択肢形式と自由記述形式を併用した無記名式のアンケートを行った（資料1、41頁に掲載）。本章ではアンケートの回答から参加者の構成や満足度を明らかにし、イベントを通じてどの程度プロジェクトの意図が実現できたかを探る。

6.1. 参加者の構成——年齢分布と参加動機

まず参加者の構成であるが、年齢は10代から70歳以上と広範囲にわたっている（図7）。各回とも18～23歳が多い。この年齢帯の参加者は学内広報（ちらし、ポスター、授業等を通じての声かけ）を通じて募集した和光大学生が大多数を占めている。一般市民の参加は和光大学生の数を除いた、少なくとも27名（第1回）、17名（第2回）となり、全参加者数の3分の2強（第1回）、過半数（第2回）であった¹²⁾。特定の年齢帯に偏らなかったのはよいが、20代後半の参加者が少ない。一般的に、地域に在住・在勤・通学する10～20代の若者がこの種のイベント情報に触れ、参加に至る可能性は低いと考えられる。したがって、大学が地域活性化に資するイベントのプロデュースと広報に携わったことは、若者の参加という点で一定の成果があったといえる。

一方、和光大学が開催する市民向け講座の受講生は高齢者が多くを占めるにもかかわらず、今回のイベントでは60歳以上の参加者が意外に少なかった。交流の観点から、この年齢帯への広報や関心の喚起が課題である。

参加動機は「トークのテーマへの関心」が各回とも最も多いが、カフェ、まちづくり、産学連携といった他の選択肢にも少なくない関心が寄せられている（図8）。

6.2. 満足度

満足度についてはトークの内容、交流の程度、企画全体についての回答によって測ることができる（図9）。トークの内容（問3）については「満足」「ある程度満足」を合わせて第1回82%、第2回100%であった。交流（問4）については「十分にできた」「ある程度できた」を合わせて第1回90%、第2回100%であった。企画全体（問8）については「十分に楽しんだ」「ある程度楽しんだ」を合わせて各回とも97%であった。参加者の期待に応えることができたという意味においては、イベントは成功したといえる。

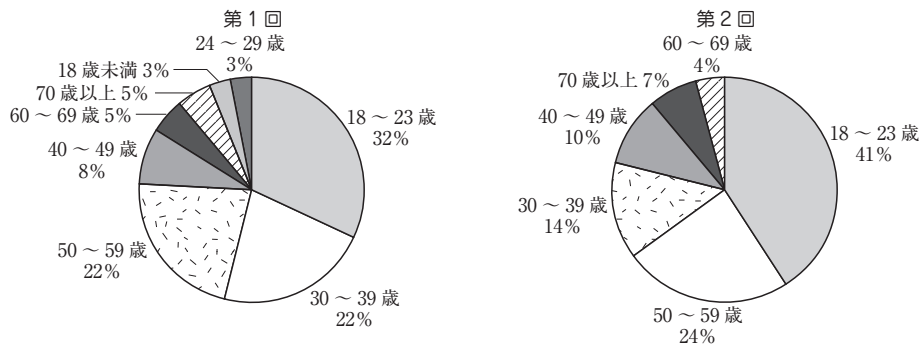
気になるのは第1回のトークについての「もの足りない」4名、無回答3名である。「もの足りない」と回答した者のうち、50代の参加者については自由記述欄に次のような回答があった。

イベントの知識がない中、参加したため、趣旨がよく分からず、もやもや感が残った。「まち」というキーワードがあるので、フェスティバルではなく「町」を掘り下げた内容の方が楽しめたかも。

この回答者は知人を通じてこのイベントを知り、参加した動機についての質問に対しては「その他」（具体的な動機は記入なし）を選択している。参加者全体のなかではめずらしく和光大学主催のイベントや講座に3回以上参加したことのある「お馴染みさん」であった。この回答者は交流はほとんどできず（問4）、企画全体についても「あまり楽しめなかった」（問8）。「イベントの知識がない中、参加したため、趣旨がよく分からず…」というコメントから、鑑賞や聴講とは異なる参加の仕方や場のモードへの戸惑いが察せられる。企画側としては「文化資源活用の新趣向を市民や若者に体験してもらう」ためにオリジナリティや新規性に挑戦したかったわけだが、参加者側にとってはこれが逆に疎外の原因となるリスクをはらんでいることがわかった。広報、ファシリテーションの面で工夫と努力を要する点である。

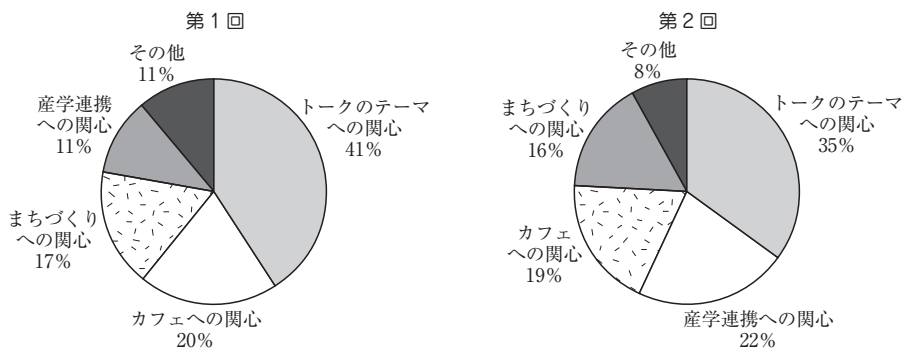
「もの足りない」と答えたもう一人は年齢から

図7 参加者の年齢分布



	第1回	第2回
18歳未満	1	0
18～23歳	13	12
24～29歳	1	0
30～39歳	9	4
40～49歳	3	3
50～59歳	9	7
60～69歳	2	1
70歳以上	2	2
回答者数合計 (参加者数)	40 (41)	29 (30)

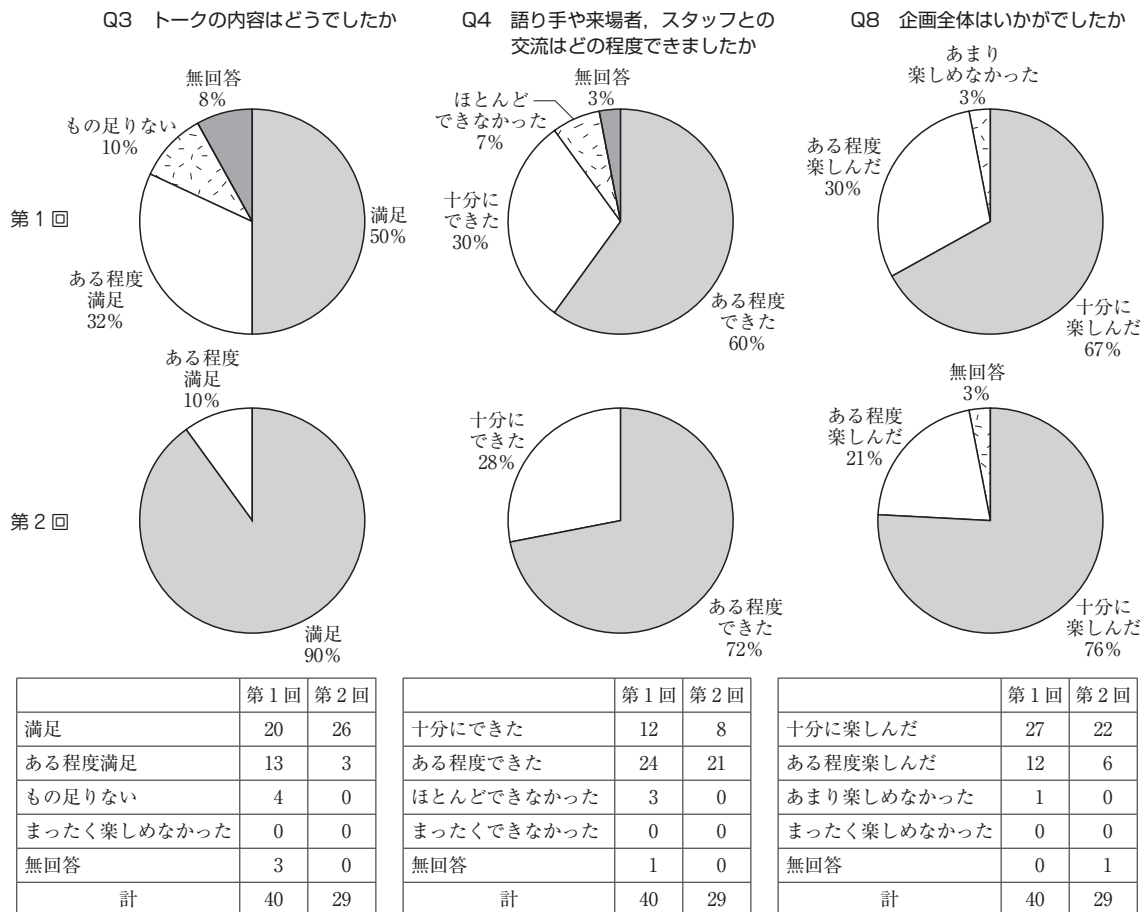
図8 参加動機（複数回答可）



	第1回	第2回
トークのテーマへの関心	22	13
カフェへの関心	11	7
まちづくりへの関心	9	6
産学連携への関心	6	8
その他	6	3

※回答者数合計（参加者数）第1回 40（41）、
第2回 29（30）。

図9 満足度



和光大学学生であった可能性が高い。イベント後、語り手（長尾）の授業を受けたことのある参加学生にインフォーマルな会話のなかで話題にしたところ、「大学での90分の授業からすると、もう少し深いところまでいくかと思った」という意見が聞かれた。

上記のコメントからうかがえるのは、「まち」のコンセプトとトークの内容のずれ、掘り下げ不足、時間といった問題である。

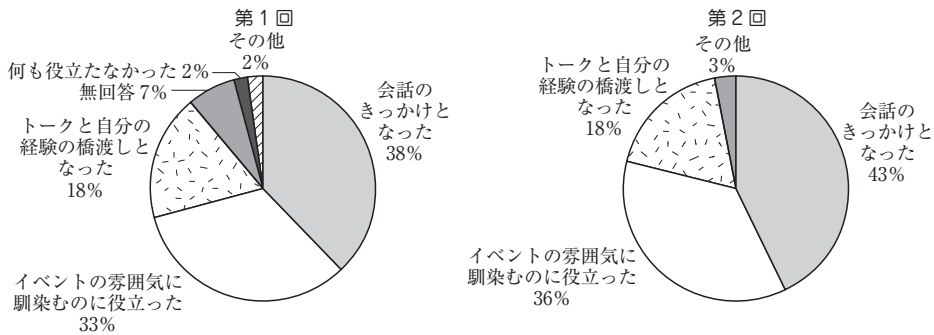
企画者であると同時に第1回の語り手を務めた筆者（長尾）にとっては、学生と市民が混在する聴衆を相手にどこまで話せばよいかという課題は当初からあった。トークの趣旨は、ワシントンDCという一般的には政治の町として知られる大都市がもつ意外な文化的側面を毎年恒例のスミソニアン・フォークライフ・フェスティバルの風景

（それ自体小さな町になぞらえることができる）やそれを支える人びとの姿から伝え、その活気や魅力は私たちがくらす町にも見出し、あるいは持ち寄ることができる可能性を示唆するというものであった。企画全体の中では後半の交流タイムへのつなげ方を意識し、トークには話題提供という位置づけをもたせた。さらに、食事のサービス（入場時から提供開始）や交流ワークショップと抱き合わせにしたプログラムの初回ということで、時間的なプレッシャーがあった。結果的にフェスティバルと「町」との関連について端折ることになってしまったのは反省すべき点である。それでも企画全体の満足度が高かったのは、進行役の巧みなファシリテーションと交流ワークショップに負うところが大きい。

第2回は経験豊かな語り手なので心配はなかつ

図 10 交流ツールの効用

(Q5「まちまちシート」はどのように役立ちましたか)



	第1回	第2回
会話のきっかけとなった	17	14
イベントの雰囲気に馴染むのに役立った	15	12
トークと自分の経験の橋渡しとなった	8	6
何も役立たなかった	1	0
その他	1	1
無回答	3	0

「その他」記入内容

第1回 7点 (10点満点中)

第2回 地元の長所を再確認するきっかけになった

たが、それでも事前にイベントの説明だけでなく、会場下見、関係者顔合わせなどを行い、企画趣旨とプログラムの理解を図った。当日は初回に比べて時間配分もスムーズで、トークの終わりには語り手自身が会場からの質問やコメントを促し、かなり高度な内容の質疑応答も行われた。第2回のきわめて高い満足度はこうした進行を反映しているといえるだろう

満足度の高さは運営側の工夫や努力に帰せられるばかりでなく、参加者自身の意識やふるまいにも大きく左右される。「まちまちシート」の活用に関する回答はその一端を垣間見ることのできる材料となろう (図10)。各回とも「会話のきっかけとなった」がもっとも多かった。「まちまちシート」を用いたワークショップのもっとも動的な部分 (学生が回収後、パネルで共有し、語り合う) はプログラムが3分の2ほど進行してからとみてよい。受付時に渡された「まちまちシート」が参加者同士の会話のきっかけとなったとすれば、それは実は参加者自身がそれを早くから活用して会話のきっかけと「した」からなのである。その意味で、参加者の積極的な姿勢がうかがえる。3番目に多かった「トークと自分の経験の橋渡しと

なった」についても同様のことがいえるであろう。

2番目に多かったのは「イベントの雰囲気に馴染むのに役立った」である。これは、講演会でもなく、学校や趣味のサークルなどでの仲間づくりとも異なる交流¹³⁾ という、やや分かりづらい企画がはらむリスクを「まちまちシート」が緩和し、満足度の向上にも少なからず寄与したと解釈できる。

6.3. プロジェクトの意図の実現

表5 (42頁以降に掲載) には記述式回答を年齢帯順に配列し、記述の全文を採録した (「自由記述」欄)。第2回では第1回開催時のアンケートに「今後取り上げてほしいテーマ」の設問を追加したが、その他の内容も含まれるため、自由記述と同様に全文採録した。そのうえで、プロジェクトの意図がどの程度実現できたかを測定する項目として①トーク、②交流、③食、④空間、⑤新規性を設定し、記述式回答からこれらの項目に関する言及と判断できる文言を抽出した。さらに「その他」として評価にかかわる文言を抜きだし、コーディングをほどこした (【 】で表示)。こうした記述式回答の分析と先にみた満足度の評価

(図9)を合わせて、プロジェクトの企画意図が参加者の経験レベルでどの程度実現されたかを考察する。

年齢帯の若い順から配列したことによって、記述式回答は市民から比較的多く得られたことが分かる(23歳までは学生を想定)。本プロジェクトでは、まちなかのカフェという文化資源を活用する主体としてイベント参加者が位置づけられ、交流は活用の要にあたる。満足度分析を行った前項でみたように、この点については「十分にできた」「ある程度できた」を合わせて第1回90%、第2回100%という好結果を得ることができた。記述式回答においては「楽しい空間をいろんな年代の方とシェアできてすごくよかった」「色々な人と交流できて大変楽しかった」「近寄りがたい大学の先生から話を聞き、交流をはかれる」といった、人との交わりから得られる喜びへの言及ばかりでなく、「実はたくさんの魅力がどの街にもあるということに気づかされました」「日本各地に足を運び新しい発見〔を〕したい」といった回答もあった(表5「②交流」欄)。

これらは交流タイムでのやりとりを通じた学び(気づき、新たな行動への欲求の芽生え)があったことを示唆している。本プロジェクトの意図が参加者に伝わり、経験レベルで多少なりとも実現された形跡と受け取れる。キープ・ウィルダニングからも「老若男女問わず参加していただくイベントはなかなかない。そういう意味ではよかった。世代の異なる方々が活発に会話を交わしていたように見受けられた」との発言があった¹⁴⁾。

飲食店が通常の文脈で対象としているのは消費者であり、マーケティング上は年齢、性別、職業などで細かくセグメント化される。しかし、今回のイベントは市民を対象とした実験的なものだったため、会場(44APARTMENT)の通常の利用者とは異なる構成となった。また、大多数の日本の大学生はきわめて狭い年齢層の集団の中で学生生活を送っており、かたや自治体や大学が提供する市民講座の受講は高齢者に偏りがちである。本プロジェクトでは、こうした世代間の分離につながりをもたらしえる、新たな交流機会と場を創出

できたといえるのではないだろうか。

④空間では「照明や空間もあたたかくて、とても居心地の良い」という企画の趣旨・会場選定の意図がストレートに伝わったと思われる回答、「教室を飛び出してお酒を片手に語り合う時間はとても気持ち良かった」「夜のカフェでお勉強」といった、学びの場所の意外性への言及があった。⑤新規性においては「肩肘はらずに参加できるこの雰囲気は今までにない」¹⁵⁾というポジティブなコメントを得た。

とはいえ、実務サポートの立場からイベントを観察していた和光大学地域連携研究センター担当職員からは「ビュッフェ形式だが参加者の流動的な動きはなかなか見られなかった。…テーブルを移動して親交を広げることは難しいかと感じました」¹⁶⁾といった感想も聞かれた。参加者同士の親交を築く(企画側からすれば、出会いを取り持つ)ことが目的ではないが、各参加者がもつ経験や感情、考えの表現・共有を通じた学び合い、相互触発という意味での交流の質を上げるためには「出会い方」も重要である。今後も類似の実験を重ね、検証と工夫を行っていく必要があるだろう。

7. 成果と課題

今回のプロジェクトでは知の拠点であり高度な学びの場でもある大学、そして社会的ミッションに取り組む企業の双方を文化資源とみなし、両者が連携することによって「夜カフェ×大学 まちまちトーク・クロッシング」という新たな交流機会と場を創出することができた。地域貢献や教育・学習など多岐にわたるニーズに応じて拡充されつつある文系の産学連携の社会的意義において、本プロジェクトは企業と大学のwin-winの関係を構築し、「町にカルチャー・スポットをつくる」という点で一定の成果をあげることができた。整理すれば以下ようになる。

- ① カフェ空間における共創的な交流と学びの実現
- ② 「夜カフェ×大学」という交流型学習パッ

ページの提示

- ③ 交流ツールの開発
- ④ カルチャー・スポット概念の深化

①について、日本の首都圏の一般的な営業形態におけるカフェでは、友人知人などの既知の者同士で飲食行動を共にしてコミュニケーションを図ることが主であり、テーブルを超えて初対面同士が共通の話題で会話を交わす場面は少ない（図

11）。また大学授業においても、ゼミや実技での例外はあるが、通常は同一性の高い集団が講義形式の空間で知識の伝授を行うことが大半である（図12）。共通の地域・文化資源のテーマのもとにゆるやかな学びのコミュニティを形成するには、大学とカフェ¹⁷⁾の特徴をあわせ持ち、異なる集団からの参加者が集う場が適しており、それにより（図13）に示すようなコミュニケーションモデルが成立し得たと言える。

図 11 カフェにおける情報フロー
(既知の間柄での交流が中心)

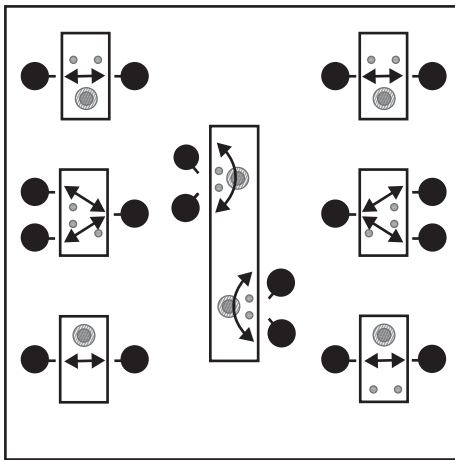


図 12 大学における情報フロー
(伝統的な講義形式が中心～ゼミ等例外を除く)

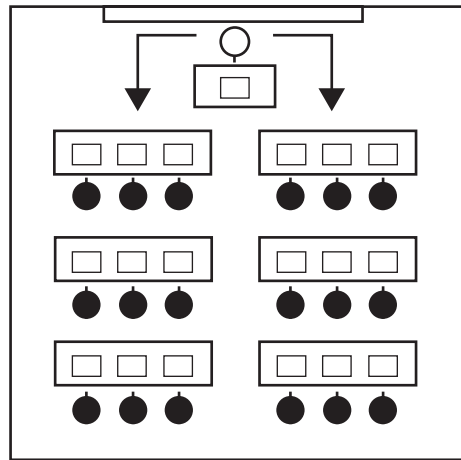
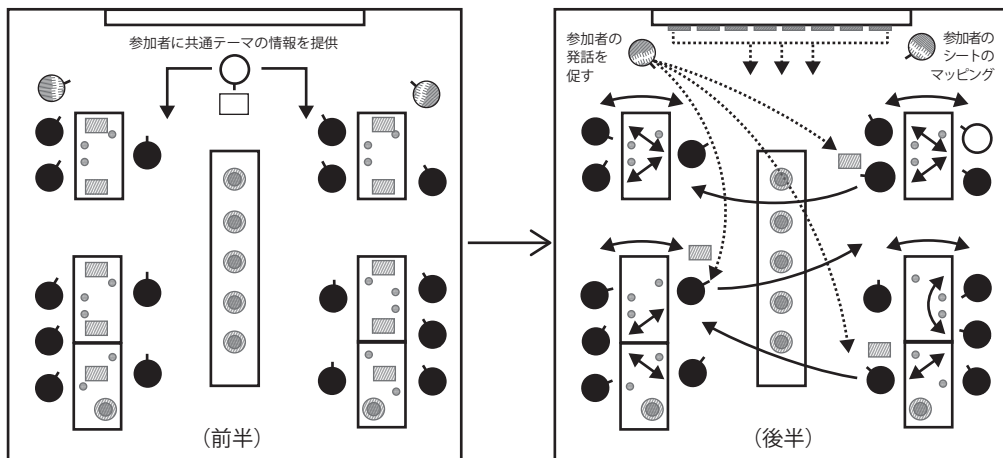


図 13 カフェ×大学における情報フロー
(前半は講義形式に近く、後半は交流の場に)



- 〈凡例〉 ● 参加者（視線の方向を棒で示す）
○ 語り手（前半）
● 進行役／ファシリテーター（後半）

- まちまちシート（見せ合い→貼り出し）
● 食事（中央ビュッフェ）
□ 共通テーマの情報（スライド／プリント）

商業空間としてのカフェは独自の社会的ミッションやテーマを持っても基本的には消費の場であり、テーマ空間そのものが現代においては消費の対象である。したがって、かならずしも社会的コンセプトは十全に生かされないという限界も抱えている。「夜カフェ×大学 まちまちトーク・クロッシング」は、カフェ空間を価値の創出や共有が活性化される「カルチャー・スポット」と捉え直したことによって、消費とは異なる回路をもつ共創的な交流と学びの場を現出しえたといえよう。

「夜カフェ×大学」はまた交流型学習パッケージでもある(②)。4.1.で述べたように「夜カフェ」には大人の時間と空間、くつろぎ、好奇心をくすぐる感じ、親密さといった語感があり、企画段階では意識していなかったが「ワールド・カフェ」着想の原点にも通じる¹⁸⁾。「夜カフェ×大学」はイベント名を検討する過程で出てきたコンセプトであるが、実施を経て、ビジネスと大学のそれぞれが持ち寄る資源を組み替えれば、街や多様性といった今回のテーマとは異なる、さまざまなテーマについて、大学だけではできない学びや価値創造が期待できることに気づかされた。それはコンセプトを越えて、交流型学習パッケージとして広く応用可能であると考えられる。応用可能性という点では「まちまちシート」「まちまちパネル」という交流ツールを開発することもできた(③)。

本プロジェクトでは、前述の通り異なるバックグラウンドを持つ参加者が集っていた点に特徴がある。前半で語り手による話題提供を通じた共通認識を参加者同士が共有し、後半で個々の参加者の思考を「まちまちシート」で外在化し、テーブル内で共有、さらに全体を「まちまちパネル」によって集合的にメタ認知¹⁹⁾し、その書き手たちを進行役が紹介して発言の機会を与えることで、参加者の個々の点と点を繋ぐ役割を果たしていた。まず初対面同士の発話のきっかけを作り、さらに全体での共有後に離れた席の参加者同士が声をかけあい名刺を交わすなど、「まちまちシート」の内容を通して交流が拡大する様子も観察された。

さらに、カルチャー・スポット概念を深めることができた(④)。カルチャー・スポットは、文化資源論や空間の生産論を基盤としながらも、いかに生きた文化的営みを大学教育の現場に取り入れ、学生が社会と共有しうるような知や技能へと変換・醸成していけるか²⁰⁾という実践的なレベルで発案された用語であり、粗削りな概念であることは否めない。

しかし、本プロジェクトを通じてカルチャー・スポットはオーナー(または管理者、運営者)の意識や取り組み、利用者の関心や行為によって経験のされ方が変化し、意味や価値が創出される動的な文化資源であることが示された。数々のカフェ空間やサロンをプロデュースしてきた山納洋は場づくりには技法や流儀があると説き、それを「場づくりについてのリテラシー」と呼んでいる(山納 2016: 180)。「夜カフェ×大学 まちまちトーク・クロッシング」において変化や創発を促すには集まった人びとがもつアイデア・経験・情報などを引き出し、交換する仕組みやツール、ファシリテーターが大きな役割を果たした。その意味でカルチャー・スポットの活性化には時間や場の共有経験や事例分析からもたらされる「リテラシー」が関係しているといえる。企画検討とチーム・ビルディング、イベント実施とふりかえりの過程は関係者が文化資源としての場所／空間のリテラシーを身に付けていく過程でもあったのだ。

カルチャー・スポットを担う本格的なコミュニティ形成には数日間、複数年度にわたる継続的な積み重ねが重要であるが、2時間ほどのイベントであっても回を重ねるごとにその可能性が高まっていく。たとえば、第1回イベントの交流タイムでは「行ってよかった町とその理由」というデータの集合から、参加者にとって価値の高い文化資源を客観的視できるプロセスとなり、第2回の交流タイムでは、参加者自身の地元の魅力(お気に入りの場所・もの・雰囲気)を言語化するプロセスにおいて自然、伝統文化、文化施設、食文化、街並みといった地域資源の構成要素があぶり出された。参加者の多くがリピーターであったことからある程度の連続性が保たれつつも、新たな参加

者による新鮮さが加味され、多様な価値観にもとづく文化資源の情報を集積させ俯瞰することによって、それぞれにとっての文化資源（カルチャー・スポット）の考え方や具体的な姿を相対化することができた。

今後はこうした成果をふまえ、大学教育や大学が提供する市民向けの企画（イベント、講座、ワークショップなど）をより多様性に富んだ、創発的なモードへと変革していくことが望まれる。

一方で、課題がないわけではない。本プロジェクトの主要部をなしたイベントでは多様性を重視したが、主に考慮したのは学生－社会人、専門家－一般という社会的立場における違い、学生－市民という地域社会への関わり方の違い、異なる世代という意味での多様性であった。今後はエスニシティ、障がい、信仰、職業、居住地、出身、趣味、ライフステージ、ジェンダーなど異なる観点からの多様性を考慮することで、人びとの創発力＝創造し触発しあう力を高める機会や場を創出していきたい。

また、産学連携の文脈では高度で専門的な知的財産をもつ大学の研究機関としての側面が強調されがちであるが、大学は「教育機関」でもあることをここであらためて認識する必要がある。本プロジェクトは「大学の教育機関としての地域での役割」という点には課題を残していると考えられる。

運営スタッフとして関わった長尾ゼミと芸術学科の有志の学生からは、このような実践の場、「産学連携というホットな場」での活動を通して企業のイベント運営の実際を学ぶ貴重な体験をすることができた、と前向きな声を聞くことができた。このことから、今後は本プロジェクトを企業と連携した学外（町）における交流型学習パッケージの企画運営というだけではなく、このパッケージをつくっていくプロセスと現場（町）を学びの場とすることも可能であると考えられる。この点については、2019年度の経営学科選択専門科目「産学連携実践論」（平井）のプログラムにおいて「まちまちトーク・クロッシング」をテーマとして取り上げており、実行委員会が中心だっ

た企画を現在はその履修生が中心になってつくっているところである。回を重ねるごとにツール設計やファシリテーション、準備から実施までのプロセスの中心が学生チームの役割へと移行しつつあるという点では、正統的周辺参加型モデル²¹⁾としても機能し得るだろう。学内におけるプロジェクトの位置づけにより、大学組織内における支援体制も変わってくる。この課題に対する大学の教育プログラムとしての取り組みがどのような成果をあげることができるかは、また稿を改めて考察する。

【注】

- 1) こうした世代やジェンダーによる分離状況を角野（2010）は仕事と居住をめぐる空間的問題として整理している。
- 2) 2017年度和光大学地域連携研究センター社会連携研究プロジェクト「地域社会における文化資源と若者・市民の創発力の融合にむけた実践的研究」。
- 3) 西武信用金庫 街づくり支援 <http://www.seibushinkin.jp/consulting/support/shien/> 2019年12月21日閲覧。
- 4) 数少ないまとまった研究としては吉田編書（2014）がある。
- 5) いずれも「空間の概念は心的なものと文化的なものを、社会的なもの、歴史的なものを結びつける。それはこの概念が発見（大陸や宇宙の未知の新空間を発見）し、生産（それぞれの社会に固有な空間的組織を生産）し、創造（諸種の作品を——景観、あるいは記念建造物や装飾をもつ都市を——創造）する複合的過程を再構成する」（ルフェーブル2000: 9）というビジョンにたつ空間の生産論にもとづいた分析を行っている。各論考では文化資源の概念を明示的に用いているわけではないが、出稼ぎ工女の社会的世界や「坂の町アート」と銘打った地域芸術祭における空間の質的転換（空間の生産・再構成につながりえる）は、文化資源の活用と密接なかかわりをもつ様相を捉えている。長尾（2019）では、20世紀前半の日本で風俗慣習、口承伝承、民俗芸能、民謡、風景など資源の文化領域が人びとはたらしかけによって組み替えられ、新たな空間として生産（再構成）されたプロセスをよりダイナミックかつ包括的に空間誌として描出した。
- 6) 2016年度、長尾研究室を中心に学生とともに和光大学周辺の「文化にふれる場所」「文化を生み出す場所」「余暇を楽しむ場所」などを「カルチャー・スポット」として発見・発信する活動として用い始めた。
- 7) 昨今では観光などの文脈で「観光スポット」、「おすすめスポット」、「最新スポット」といった用語法が浸透している。
- 8) 「おもてなし規格認証」は2016年に経済産業省がサービス産業と地域の活性化を目的に創設した認証制度。「おもてなし規格」は①価値の創出をともなう顧客満足、②地域・社会との共生、③従業員の能力・意欲の向上を通じた満足が継続的に追求されるプロセスと定義される。紅認証、金認

証, 紺認証, 紫認証の4種があり, 紺認証は独自の創意工夫が凝らされたサービス提供者に対して与えられる。おもてなし規格認証とは <https://www.service-design.jp/about/> 2019年12月21日閲覧。

- 9) キープ・ウィルグループ <https://www.keepwill.com/> 2019年12月21日閲覧。
- 10) 近郊農業が営まれる秦野市・海老名市は神奈川県に接する町田市の周辺地域にあたり, アクセスも容易である。
- 11) スタッフを除く収容人数を40名と見込んで募集していたが, 立食形式の食事や交流ワークショップのために回遊性が生じることから, 第1回は会場がやや手狭に感じられた。そのため第2回は広報, 申込受付段階から調整を行っていたのに加え, 6名が欠席したためこのような数字となっている。なお, 両方の回に参加したのは9名であった。
- 12) 学外に対する広報はおもに和光大学の公式ウェブサイト, プレスリリース, ちらしを通じて行った。ちらしはキープ・ウィルダイニングを通じて配布のほか, 和光大学の通常の広報ルートを利用し, 周辺の大学や幅広い年齢層が利用する文化・教育施設(約50ヶ所)に送付した。
- 13) ここでの「交流」は各参加者がもつ経験や感情, 考えの表現・共有を通した学び合い, 相互触発が意図されている。
- 14) 2018年10月31日第4回実行委員会。大学メンバーからは「初対面の参加者どうしとの交流はどこまでできただろうか」「まちまちシートは近くに座っている参加者ともっと積極的にシェアしてもらおうよう促したほうがよいのでは」といった意見が出たため, 第2回の改善事項とした。
- 15) 整理番号226の記述内容全体から推察するに, 通常の学びの場に臨む際の力みから解放されること, 語り手(講師)とのコミュニケーションが明示的に推奨されていることに新しさを見出している。
- 16) 2019年1月15日職員からの聞き取り。
- 17) ここでは「2.2. カフェ」で提起したように, 社会生活に活力をもたらす, 人びとの主体性や創造性を引き出して集合知を形成する環境という意味でのカフェをさす。本プロジェクトの場合, 飲食はイベント参加者同士のコミュニケーションを誘発し円滑化する要素として位置づけられるとともに, 地場生産物を積極的に取り入れているキープ・ウィルダイニングとの協働を望んだ連携機関間の価値観の共有・共鳴を引き出す要素であったことも指摘しておきたい。
- 18) 創始者のアニー・ブラウンとデイビッド・アイザックスは知的資本経営関連のリーダーを自宅に招いた際, ゲストがリラックスして互いに率直に話し合えるようさまざまな空間的工夫をこらした結果, 創造性にあふれた会話が展開されたことをきっかけに「ワールド・カフェ」を開発・提唱するようになった。
- 19) メタ認知とは自分自身を客観的に認知する能力であるが, ここでは自分のシートに書いたコメントが他者のものと合わせて同一パネル上にマッピングされることで, 自分の思考・行動を対象化して客観視することができる認知のあり方をさす。ワークショップなどの学びの場では思考を外在化して並べる・つなぐなどの「ファシリテーション・グラフィック」が相互理解を促すと言われている(堀・加藤2006)。

- 20) これは学生だけでなく教員や大学組織全体にとっても必要なことかもしれない。
- 21) 正統的周辺参加とは, 学びの集団の中で, 新参者が周辺から徐々に参加して古参者と一体となり, 実践共同体を形作るという参加形態のこと。レイヴ&ウェンガー(1993), ウェンガー・マクダーモット・スナイダー(2002)に詳しい。

【参考文献】

- 朝日新聞社 CSR 推進部編 (2015)『認知症カフェを語る——ともに生き, 支えあう地域をめざして』メディア・ケアプラス
- ウェンガー, エティエンヌ, リチャード・マクダーモット, ウィリアム・M. スナイダー (2002)『コミュニティ・オブ・プラクティス——ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』野村恭彦監修, 桜井祐子訳, 翔泳社 (Wenger, Etienne, Richard McDermott and William M. Snyder. *Cultivating communities of practice: A Guide to Managing Knowledge*, Harvard Business School Press, 2002.)
- 内堀基光 (2007)「序——資源をめぐる問題群の構成」内堀基光編『資源と人間』弘文堂
- オルデンバーグ, レイ (2013)『サードプレイス——コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』忠平美幸訳, みすず書房 (Oldenburg, Ray. *The Great Good Place: Café, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons and Other Hangouts at the Heart of a Community*, Da Capo Press, 1989.)
- 浦野寛子 (2014)「文系産学連携による共創的地域ブランド・マネジメント——実践事例からみた文系大学の役割」吉田健太郎編著 (2014)『地域再生と文系産学連携——ソーシャル・キャピタル形成にむけた実態と検証』同友館
- 角野幸博 (2010)「仕事と居住の空間的課題」『都市住宅学』68号, 47-50
- 兼本雅章 (2015)「日本における産学連携——その変遷と文系産学連携を中心に」『総合政策論叢』第6号
- 荻宿俊文 (2012)「地域に根づくということとワークショップ『ワークショップと学び2: 場づくりとしてのまなび』
- 荻宿俊文・高尾美沙子・畑中朋子・吉田裕典 (2007)「ワークショップスタッフの成長と正統的周辺参加(調査に基づくインタラクションのデザイン, コミュニティ活動のデザイン)」『デザイン学研究 研究発表大会概要集』(54), 100-101
- 北根精美 (2016)「地域活性化のためのプロジェクト型教育の実践——産学官連携によるアクティブ・ラーニング事例を中心に」*Bulletin of Asian Design Culture Society* 10 (下), 1103-1112
- キープ・ウィルダイニング (n.d.)『東京ローカルをオモシロク』キープ・ウィルダイニング (会社紹介資料)
- 草津市草津未来研究所 (2015)『大学と地域の連携に関する調査研究報告書——大学のある都市としての優位性を活かすために』草津市草津未来研究所
- 小林章夫 (2000)『コーヒー・ハウス』講談社
- 佐藤健二 (2007)「文化資源学の構想と課題」山下晋司編『資源化する文化』弘文堂

- ジンマーマン, エリック・ウォルター (1954)『世界の資源と産業』後藤誉之助・小島慶三・黒沢俊一訳, 時事通信社 (Zimmermann, Erich Walter. *World Resources and Industries*, Harper and Brothers, 1951.)
- 鈴木栄・前田隆子・松尾慎・磯部理美・山本晃史 (2018)「ワールド・カフェ実践報告: 話し合いから気づき・発見へと繋がる輪」『教職・学芸員課程研究』創刊号, 東京女子大学 教職課程・学芸員課程
- ティーレ＝ドールマン, クラウス (2000)『ヨーロッパのカフェ文化』平田達治・友田和秀訳, 大修館書店 (Thiele-Dohrmann, Klaus. *Europäische Kaffeehauskultur*, Artemis & Winkler Verlag, 1997.)
- 東京文化資源会議編 (2016a)『TOKYO1 / 4 と考える オリンピック文化プログラム——2016 から未来へ』勉誠出版
- 東京文化資源会議編 (2016b)『TOKYO1 / 4 が提案する 東京文化資源区の歩き方——江戸文化からポップカルチャーまで』勉誠出版
- 長尾洋子 (2009)「文化実践としての芸能と空間の生成」神田孝治編著『レジャーの空間』ナカニシヤ出版
- 長尾洋子 (2018)「2017 年度 社会連携研究プロジェクト活動報告書 地域社会における文化資源と若者・市民の創発力の融合にむけた実践的研究」
- 長尾洋子監修, 畑中朋子 AD (2018)『カルスポ探検へようこそ——和光大学生とめぐって愉しむ文化・場所・歴史』和光大学長尾研究室
- 長尾洋子 (2019)『越中おわら風の盆の空間誌——〈うたの町〉からみた近代』ミネルヴァ書房
- 畑中朋子 (2006)「アートとメディアと人々が会おう場としての地域文化施設: e- とびあ・かがわ『ワークショップ・オン・ワークショップ 2005』及び他の事例からの考察」『美術教育学』27 (0), 323-335, 美術科教育学会
- 畑中朋子 (2014)「産学・公学連携事業における教育コンテンツデザインへの取り組み」『美術教育学研究』(46), 205-212, 大学美術教育学会
- ハルプリン, ローレンス, ジム・バーンズ (1989)『集団による創造性の開発——テイキング・パート』杉尾伸太郎・杉尾邦江訳, 牧野出版 (Halprin, Lawrence and Jim Burns, *Taking part: A Workshop Approach to Collective Creativity*, MIT Press, 1974.)
- 平井宏典 (2008)「真鶴町ではじまった町民主導によるまちづくり——うみどりの誕生 (真鶴町「景観重要公共施設」の試み)」『まちづくり』(17), 82-85, 学芸出版社
- 平田暁子 (2019)「新たなご当地グルメ開発による新井薬師地区活性化プロジェクト——地域連携商品『ブルーベリーぱん』の製品化」『目白大学短期大学部研究紀要』(55), 29-43
- ブラウン, アニータ, デイビッド・アイザックス, ワールド・カフェ・コミュニティ (2007)『ワールド・カフェ——カフェ的会話が未来を創る』香取一昭・川口大輔訳, ヒューマン・バリュー (Broun, Juanita, David Isaacs and World Café Community. *The World Café: Shaping Our Futures Through Conversations That Matter*, Berrett-Koehler Publishers, 2005.)
- 堀谷俊・加藤彰 (2006)『ファシリテーション・グラフィック——議論を「見える化」する技法』日本経済新聞出版社
- 増田周子 (2008)「大阪におけるカフェ文化と文藝運動——明治末から大正初期を中心として」竹村民郎・鈴木貞美編『関西モダニズム再考』思文閣出版
- 三浦麻子・中村早希 (2017)「チョコレートとコミュニケーションの心理学」第 22 回日本チョコレート・カカオ国際栄養シンポジウム講演集, 13-18
- 明治大学商学部編 (2011)『社会に飛びだす学生たち——地域・産学連携の文系モデル』同文館出版
- 森山工 (2007)「文化資源 使用法——植民地マダガスカルにおける『文化』の『資源化』」山下晋司編『資源化する文化』弘文堂
- 山崎亮 (2011)『コミュニティデザイン 人がつながるしくみをつくる』学芸出版社
- 山下晋司 (2007)「序——資源化する文化」山下晋司編『資源化する文化』弘文堂
- 山納洋 (2016)『つながるカフェ——コミュニティの〈場〉をつくる方法』学芸出版社
- ルフェーブル, アンリ (2000)『空間の生産』斎藤日出治訳・解説, 青木書店 (Lefebvre, Henri. *La Production de L'espace*, Economica, 1974.)
- ユンガー, ヴォルフガング (1991)『カフェハウスの文化史』小川悟訳, 関西大学出版部
- 吉田健太郎 (2014)「はじめに」吉田健太郎編著『地域再生と文系産学連携——ソーシャル・キャピタル形成にむけた実態と検証』同友館
- 吉田健太郎編著 (2014)『地域再生と文系産学連携——ソーシャル・キャピタル形成にむけた実態と検証』同友館
- レイヴ, ジーン, エティエンヌ・ウェンガー (1993)『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』佐伯胖訳, 産業図書 (Lave, Jean, and Etienne Wenger. *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge University Press, 1991.)
- Ariès, Phillipe (1977) "The Family and the City", *Daedalus*, Vol. 106, No. 2, 227-235. (<https://www.jstor.org/stable/20024485>)
- Janis, I. L., Kaye, D., & Kirschner, P. (1965) "Facilitating effects of "eating-while-reading" on responsiveness to persuasive communications", *Journal of Personality and Social Psychology*, 1, 181-186.
- Nagao, Yoko (2006) "The Visible and Invisible Urban Void: How they can be captured in the strata and networks of local activities and negotiations", in *modern Asian Architecture Network mAAN, Proceedings of the 6th International Conference*, 236-243.
- Nagao, Yoko (2013) "Folk Performing Arts, Community Life, and Well-being: Why Shishimai Matters in Toyama, Japan", *Paragrana*, 22 (1), 130-153.
- Razran, G. H. (1940) "Conditioned response changes in rating and appraising sociopolitical slogans", *Psychological Bulletin*, 37, 481.

謝辞

本プロジェクトは、2018年度西武信用金庫「地域産業応援資金」および和光大学地域連携研究センターの助成を受けて実施が可能となりました。記して謝意を表します。また、連携機関および実行委員会構成機関として、本プロジェクトの趣旨に賛同していただき、多大なご協力を賜りました株式会社

キープ・ウィルダイニング、西武信用金庫の関係者の皆様に御礼申し上げます。イベントにご登壇下さった落合一泰氏、参加者の皆様、準備・運営にご尽力いただいた間下奈津子さん（設計協力）、藤巻瞬さん（撮影協力）、長尾ゼミ生、畑中ゼミ生の皆さんにも厚く御礼申し上げます。

資料1 アンケート

〈各回共通〉

1. このイベントをどのように知りましたか？
ちらし ・ 和光大学ホームページ ・ フェイスブック ・ ツイッター ・
知人から（学校・職場関係を含む） ・ その他（ ）
2. 参加した動機を教えてください。
トークのテーマへの関心 ・ カフェへの関心 ・ まちづくりへの関心 ・
産学連携への関心 ・ その他（ ）
3. トークの内容はどうでしたか？
満足 ・ ある程度満足 ・ もの足りない ・ まったく楽しめなかった
4. 語り手や来場者、スタッフとの交流はどの程度できましたか？
十分にできた ・ ある程度できた ・ ほとんどできなかった ・
まったくできなかった
5. 「まちまちシート」はどのように役立ちましたか？
会話のきっかけとなった ・ イベントの雰囲気に馴染むのに役立った ・
トークと自分の経験の橋渡しとなった ・ 何にも役立たなかった ・
その他（ ）
6. 本日の会場（ダブルフォーアパートメント町田店）に来店したことはありますか？
今回が初めて ・ 2回目 ・ 3回以上来店したことがある
7. 今回のビュッフェ（料理・ドリンク）はいかがでしたか？
十分に楽しんだ ・ ある程度楽しんだ ・ あまり楽しめなかった ・
まったく楽しめなかった
8. 企画全体はいかがでしたか？
十分に楽しんだ ・ ある程度楽しんだ ・ あまり楽しめなかった ・
まったく楽しめなかった
9. これまで和光大学主催のイベントや講座に参加したことはありますか？
今回が初めて ・ 2回目 ・ 3回以上参加したことがある
10. 年齢について教えてください。
18歳未満 ・ 18～23歳 ・ 24～29歳 ・ 30～39歳 ・
40～49歳 ・ 50～59歳 ・ 60～69歳 ・ 70歳以上

★ご感想や、語り手、スタッフへのメッセージなどありましたら、裏面を使ってご自由にお書き下さい。

〈第2回の追加質問〉

11. 今後「夜カフェ×大学」で取り上げてほしいテーマがあれば、お書きください。

表5 記述式回答の分析

第1回

整理番号	Q10 年齢	自由記述	①トーク
106	18 未満	<u>とてもおもしろいイベント</u> でした。 <u>機会があればまた参加したい</u> と思いました。ありがとうございました！	
105	18 ～ 23	<u>ご飯もおいしく、照明や空間もあたたかくて、とても居心地の良いイベント</u> でした。	
110	18 ～ 23	本日はありがとうございました。	
129	18 ～ 23	長尾先生のお誘いで、今回参加させて頂きました。会場のお店にくるのも初めてで、 <u>美味しい料理とトークで楽しむことが出来ました</u> 。 <u>海外は行ったことがありませんが、今回のお話を聞いて、大学卒業前には行ってみたいな</u> と思いました。 <u>これから、日本各地、足を運び新しい発見をしていきたい</u> です。ありがとうございました。	楽しい 海外行ってみたい
133	24 ～ 29	語り手の方が楽しそうに夢中になってお話ししている姿に、 <u>不慣れなテーマでありながらも引きこまれていきました</u> 。 <u>見えていないだけで実はたくさんの魅力がどの街にもあるということに気づかされました</u> 。ありがとうございました。	不慣れなテーマながらも 引き込まれた
102	30 ～ 39	今回のイベントで職種も年齢も（30歳以上離れていた?!）異なるバックグラウンドの人とお知り合いになることができました。 <u>教室を飛び出してお酒を片手に語り合う時間はとても気持ち良かった</u> です。 <u>お料理はテーブル後方にかためてくれた方が取り易かった</u> です。	
103	30 ～ 39	<u>オレンジ T シャツの学生の活躍の仕方も探りたいと感じた</u> 。 <u>せっかく和光学生ももれなくたくさん参加しているのだから、和光を何気なく感じ、アピールできたらいいのかなと感じた</u> 。 <u>きっと何か新しいことを追加できるはず</u> 。	
123	30 ～ 39	<u>楽しい空間をいろんな年代の方とシェアできてすごくよかった！</u>	
124	30 ～ 39	音楽やアートが好きなので、 <u>ぜひアメリカへ行く際は立ち寄ってみたい</u> と思います。	アメリカへ行く際は立ち 寄ってみたい
111	30 ～ 39	<u>おいしい企画</u> をありがとうございました。 <u>ぜひヨーロッパとアジアの回もしてほしい</u> です。	
107	50 ～ 59	<u>超格安なコストで色々な人と交流できて大変楽しかった</u> です。 <u>次回も楽しみたいです</u> 。	
108	50 ～ 59	<u>すばらしい企画</u> でした。 <u>楽しかった</u> です。スタッフの皆様、本当にありがとうございました。先生がめっちゃキュート。	
109	50 ～ 59	次回はあいにくと参加できませんが、 <u>2回ではなくて、もっと切り口を変えて続けていただけたらうれしい</u> です。	
121	50 ～ 59	とても良かったです。ありがとうございました。	
132	50 ～ 59	イベントの知識がない中、参加したため、 <u>趣旨がよく分からず、もやもや感が残った</u> 。「まち」というキーワードがあるので、 <u>フェスティバルではなく「町」を掘り下げた内容の方が楽しめたかも</u> 。	フェスティバルではなく 「町」を掘り下げた内容 の方が楽しめたかも
119	60 ～ 69	<u>受け付けた後、ドリンクを決めさせ席に着かせる。後でラクかな？</u>	

②交流	③食	④空間	⑤新規性	その他
				とてもおもしろいイベント 【全体】 また参加したい【再参加意 思】
	おいしい	照明や空間もあたたかく て、とても居心地の良い		
日本各地に足を運び新し い発見したい	おいしい 楽しんだ			
実はたくさんの魅力がど の街にもあるということ に気づかされました				
異なるバックグラウンド の人と知り合えた お酒を片手に語り合う時 間はとても気持ち良かった	お酒を片手に語り合う時 間はとても気持ち良かった	教室を飛び出してお酒を 片手に語り合う時間はと ても気持ち良かった		料理はテーブル後方にかた めてくれた方が取り易かつ た【運営改善案】
和光学生たくさん参加し ているのだから、和光を 何気なく感じ、アピール できたらいい			(和光大学生の存在感増 せば) 新しいことを追加 できるはず	学生の活躍の仕方も探りた い【要望】
楽しい空間をいろんな年 代の方とシェアできてす ごくよかった		楽しい空間		
	おいしい企画			おいしい企画【全体】【参加 費】 ヨーロッパとアジアの回も してほしい【要望】
色々に人と交流できて大 変楽しかった				超格安なコスト【参加費】 次回も楽しみ【再参加意思】
				すばらしい企画【全体】
				2回ではなくて、もっと切り 口を変えて続けていただけ るとうれしい【要望】
				とても良かった【全体】
				趣旨がよく分からず、もや もや感が残った【不満】
				受付後の段取り【運営改善 案】

第2回

整理番号	Q10 年齢	Q11 今後取り上げてほしいテーマ	自由記述	①トーク
208	18～23	<u>町田の産業について</u>		
217	18～23	これからの人生を考えるみたいな、ライフスタイルみたいなものがおもしろいかも？		
218	18～23	夜のカフェでお勉強？ お話が聞けて楽しかったです		楽しかった
220	18～23	海外での“地方創生”“まちづくり”について。日本国内での取り組みと比較してみたい		
211	30～39	旧共産圏（東欧等）のまちのこととクロス		
226	30～39	全2回のこの企画のつづきを希望します。 <u>近寄りがたい大学の先生から話を聞き、交流をはかれる。そして何よりも肩肘はらずに参加できるこの雰囲気は今までになく、ぜひつづけてほしいと希望します</u>		
227	30～39	トークで世界一周の旅（第1回イタリア、第2回イギリス…等、それぞれの回で各国をテーマにした企画をして欲しい）	お料理がメキシコっぽい感じでとても良かったです。トークのテーマに沿った食事を提供してくれるキープウィルディングの方々は粋ですね！ 第1回目から懇意になった方と、本日もお会いできてとても良い交流の機会になりました。次回の企画がなくて少し寂しいです。素敵な企画なので継続していただきたいです！	
228	30～39	<u>アートについて、文学について、映画について、愛についての学問</u>	また開催していただきたいです！！絶対参加します！【再参加意思】	
202	40～49	<u>続けてやってほしいです</u>		
219	50～59	<u>毎月の定例イベントにして下さい。とても楽しい空間・時間です</u>		
221	50～59	<u>南米の国々の紹介</u> （例えば、ブラジルなど）		
222	50～59	<u>環境や国際関係</u>		
224	50～59	<u>今、大学生が一番興味をもっているテーマを語り尽くす</u>		
203	70以上	<u>中国問題、北方領土など。今後共続けてほしい。よろしくお願いします</u>		

②交流	③食	④会場活用	⑤新規性	その他
				町田の産業【要望】
				人生、ライフスタイル【要望】
		夜のカフェでお勉強	夜のカフェでお勉強	
				海外での“地方創生”“まちづくり”【要望】
				旧共産圏（東欧等）のまち【要望】
近寄りやすい大学の先生から話を聞き、交流をはかれる。			肩肘はらずに参加できるこの雰囲気は今までにない	つづけてほしい【要望】
とても良い交流の機会	お料理がメキシコっぽい感じでとても良かった… トークのテーマに沿った食事を提供してくれる キープウィルダイニングの方々は粹			トークで世界一周の旅【要望】 素敵な企画【全体】 継続してほしい【要望】
				アート、文学、映画、愛についての学問【要望】 また開催してほしい【要望】
				続けてほしい【要望】
		とても楽しい空間・時間		毎月の定例イベントにしてほしい【要望】
				南米の国々の紹介【要望】
				環境や国際関係【要望】
				今、大学生が一番興味をもっているテーマ【要望】
				中国問題、北方領土など【要望】 続けてほしい【要望】

(2020年4月20日 受稿)
(2020年6月2日 受理)